

B-4 人獣共通感染性サルマラリアに対する新規検出法の検討

¹⁾ 獨協医科大学 医学部4年,

²⁾ 同 熱帯病寄生虫病室, ³⁾ 愛知医科大学 上野博章¹⁾, 高木秀和³⁾, 川合 覚²⁾

【背景】マラリアは熱帯・亜熱帯地域において、年間罹患者数約2億4千万人、死者約63万人の健康被害を発生させている重要感染症のひとつである。さらに、近年人獣共通感染性のサルマラリア原虫が自然界においてヒトへ感染した症例が報告され、その実態や検出方法が検討されている。

【目的】ヒトへの自然感染が報告されているサルマラリア原虫の *P. cynomolgi* (以下 Pcy) は、ヒトの三日熱マラリア原虫と形態的特徴が極めて類似しているため、顕微鏡下で両種を鑑別することができない。鑑別するためには、開発途上国の流行地でも試行可能な遺伝子レベルの検出方法が必要となる。そこで本研究では、LAMP (Loop-Mediated Isothermal Amplification) 法による Pcy の検出方法を新たに開発し、他の方法との比較を試みた。

【実験①】Pcy の L-lactate dehydrogenase 遺伝子を標的としたプライマーを設計し、Pcy, LAMP の特異性を検討した。ヒトに感染性のあるマラリア原虫5種類 (Pf, Pv, Po, Pm, Pk) と Pcy 2株の genomic DNA をテンプレートとして Pcy, LAMP を試行した。その結果、Pcy 2株のみ陽性を示し、他種は陰性であったことから本法は Pcy を特異的に検出できる手技であることが明らかとなった。

【実験②】Pcy, LAMP の検出感度について、他の検出方法 (血液塗抹の鏡検, イムノクロマト法, PCR) と比較した。実験②では実験用アカゲザルによる Pcy 感染治療実験の経過血液を用いた。その結果、Pcy, LAMP は他の検出方法と同程度の検出感度であったが、簡便に種の同定ができる点が有益であった。

B-5 ニューモシスチス肺炎合併 HIV 治療中に肺門部腫瘤影を認めた症例

¹⁾ 獨協医科大学 放射線医学

²⁾ 同 内科学 (呼吸器・アレルギー)

³⁾ 同 病理診断学

鈴木淳志¹⁾, 荒川浩明¹⁾, 池田直哉²⁾, 石田和之³⁾, 曾我茂義¹⁾

症例は60代男性、1カ月前にニューモシスチス肺炎を発症し、HIVによるAIDSと診断。HAART療法導入し、follow up CTにて肺門部に腫瘤性病変が出現した。

肺野条件で、右肺門部腫瘤は気管支透亮像を伴う consolidation として認められ、造影CTでは比較的均一な増強効果を呈した。それ以外には、縦隔リンパ節の腫大や、脾臓の低濃度域、上行結腸の壁肥厚が認められた。画像上、NTM症や悪性リンパ腫が考えられたが鑑別困難であり、肺門部腫瘤と上行結腸の壁肥厚部位に対する施行された。肺門部生検では乾酪壊死を伴わない類上皮細胞性肉芽腫を認め、上行結腸の検体からは少量の抗酸菌が証明された。これにより、播種性NTM症の診断となった。

播種性NTM症は先天性・後天性の免疫不全者に発症する病態であり、HIVによるAIDSに伴うものや、HIV治療に対する免疫再構成症候群としての発症がよく知られている。本例は後者の発症パターンと考えられた。症状は発熱、全身リンパ節腫大、肝脾腫、下痢嘔吐など非特異的である。病変部位としてはリンパ節の報告が多く、骨、消化管、皮膚軟部組織、肺なども報告されている。画像上、通常の気管支拡張を伴う肉芽腫性細気管支炎の像と異なり、consolidationを主体とした浸潤性の病変や結節影、空洞病変などが報告されている。

昨今HIV患者数は増加傾向にあり、日常診療のなかで播種性NTM症に遭遇する可能性は高まっている。画像所見は多彩であり診断に苦慮することも多いが、発症すれば重篤で生命に関わるため、しかるべき場面で鑑別に挙げるべき疾患である。